
数学的恋愛 <恋愛方程式>

水月レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

数学的恋愛×恋愛方程式

【Zコード】

Z0002D

【作者名】

水月レイ

【あらすじ】

数学が苦手な加奈子の年上の幼馴染は数学教師だった。幼馴染以上恋人未満、そんな腐れ縁のような関係がずっと続くと思っていたが。。

(前書き)

感想、批評を教えていただけないと執筆の励みになります

加奈子にとつて数学教師は天敵だった。

成績は芳しくなかつたが、数学は嫌いでなかつたし、数学が得意な子も別に嫌いではなかつた。

現に親友の京子は数学がかなり得意だ。
そんな加奈子が数学教師を嫌いな理由はただ一つ、いけすかない年上の幼馴染みが数学教師だからだ。

「一年の終わりの数学の代行授業で奴がこの学校の教師だつた事に気が付くなんて間抜けすぎる。我が人生の一生の不覚だわ！」
シャーペンを握りしめて叫ぶと面白そうに見ていた親友の京子が呟いた。

「公衆の面前もといクラスメイトの面前で『数学嫌いでも俺は好きだ』って言われたのが一生もんの不覚つてこの間言つてなかつたけ

「ちよつと京子、こんな所でそんなにわらつと親友の恥をしゃべらないでよおおおお

周囲に誰も居ないのはわかつていたので加奈子は心ゆくまで叫んだ。

今日は一学期の期末テストの返却日だつた。

テストの返却と解説だけで、直ぐに帰れるこの貴重な日に何時までもぐずぐず残つてゐるのは、数学の特別課題を出された自分とそれに付き合つてゐる京子ぐらいだつた。

「高杉先生つて加奈の事結構好きだよね」

「ま、さ、か」

友人の言葉を両腕を開き言葉を一言一言区切つて否定した。

「京子だつて見たでしそう数学のテストを返すときの奴の笑顔を

！」

椅子から立ち上がり加奈子と向かい合つ形に回り込むと机を両手

でバンと叩いた。

「それはそれは麗しい顔で頬笑んでたね」

「あんた美意識おかしいんじゃないの！あ、れ、は、せせら笑うつていうのよ！あの自信過剰男が！人の答案用紙をちらりと見て何て言つたと思う！？」

鼻息荒く京子に迫ると親友はまさかねといつ感じでそのものズバリを言い当てた。

「間抜け」

「そりそりのよーよりにもよつて！それが必死こいて勉強した幼馴染みに言つ言葉！？」

「うわ、まさか本当に言つとは、高杉先生やるねえ」　何がやるねえなんだ。

「あいつと幼馴染みをやつてはや16年。トラウマになるほど何度も間抜けと言われ続けたのよおおお。十年ばかり先に生まれたらうつてえらそうにいいい」

ふんまんやるかたないといった感じの私に京子は痛ましいものを見るような視線を寄せた。

「あの男がこの学校で数学教師をやつていると知つていたら絶対こんなお嬢様学校には入らなかつたのに！」

今にして思えば家から一番近いという理由で選んだのがいけなかつたのだ。

めんどくさがりの奴が同じ理由で就職先をこの学校を選ぶ可能性は充分にあつたのだ。

私の考えていることが伝わったのか京子が後悔先にたたずだねえとしみじみと呟いた。

「私が数学苦手だつて知つていながらこんな鬼のような課題出するなんて性格悪すぎ」

「まあ高杉先生は好きな子ほどいじめたくなるよつなタイプだとは思うよ。だけどその課題は高杉先生の優しさだよ加奈。ながーい冬休みを数学の補習で潰れないようにつていう救済措置なんだから

大人しくやりなさい。手伝つてあげるから

34点。後一点。されど赤点は赤点。

唸りながら再び課題を片付け始めると校内放送が流れた。そして

親友の京子は見事に固まつた。

ピンポンパンポン。

『二年B組桂木京子、校内にいたら直ぐに職員室まで来なさい』
それまで涼しげな顔をしていた京子だが今は心なしか青白い。
普段から英語教師を宇宙人エイリアンと呼んではばからない彼女にとつて英
語教師による校内呼び出しは恐怖の大魔王に等しい。

京子は知らないがこの校内放送による呼び出しさは、早くも七回目
に及び一種の学園名物となつていた。

英語が極端に苦手な事を除けば成績優、秀品行方正、多芸多才の
彼女は学園一の才女と名高い。あくまで極端に英語が苦手なことを
除けばだが。

そんな京子が好きだつたので、動じつとしない親友の肩を叩き優
しく促してあげることにした。

「明日の朝のH.R.間中、恨めしげなどこか捨てられた子犬のよう
に寂しげに見つめられたらくなかったら行つてきなよ」

京子が小動物に弱いことを知つていた為、そこから的確に責める。

「うつ」

京子にとつて最悪なことに担任は英語教師だつた。その上とい
うか当然の事ながら二人の英語担当の受け持ちでもある。

幼馴染みの高杉真介と担任は旧友の関係だつたため自分には多少
ながら担当の惣流先生とは多少の面識があつたが、京子には話して
いなかつた。

「京子、英語のテスト返却の時になくなつてだしそう。先生心配
してたよ」

だめ押しが効いたのか京子は大きなため息一つつくと教室を重い
足取り出でいった。

「さてと」

「珍しく頑張ってるな加奈子」
嫌でも聞き慣れた美声に顔をあげると扉にもたれるようにして幼馴染みの数学教師高杉真介が立っていた。

そんな何気無い仕草も絵になつていて憎たらしかった。

「珍しくは余計よ。それに教師が生徒を名前で呼ぶのはどうかと思つわよ」

「お前だけなんだ幼馴染みなんだし別に構わないだろ」

「この女たらしがと内心毒づきながらも軽く赤くなつてしまつた顔を見られないように少しつつむきかげんになつた。

課題を解いているふりをすれば、ばれないだらう。」「へえ結構進んでるじゃん」

急に後ろから覗き込むようにして耳の近くで囁かれたので、心臓がドクンと強くなり、血が逆流するかのように身体中が熱くなつた。「すつすついでしよう」

意識しないようにしても声がどうしても震えてしまう。

「どうせ桂木あたりに手伝つてもらつたんだらう」

真介の耳に心地よい声が耳朵をくすぐり私の心臓は限界まで高まつていた。

「そつそうよ。京子の説明はあつあんたと違つて、どこがどう分からなかつかかるまで考えて説明してくれるからとても分かりやすいのよ」

「ふうん。まあお前と違つて桂木は優秀だからな」

「悪かつたわね」

「別にわるくわねえよ。色々と教えがいあるし」

「ヤリと意味深な笑みを向けられごまかしようがないほど顔が真っ赤になつてしまつ。耳まで真っ赤になつているかもしねない。

「このタラシが！」

ふりむきやま拳を振り上げるがヒョイッと手であつさり捕まってしまう。

その上あら「こ」とか奴の口元に運ばれ少しざラリとした舌でひとなめされた。「つ…」

ゾクリとした感覚に変な声が出てしまった。

いい声だとでも言うように真介の目が妖艶に笑った。

「真介…」

慣れない感覚について小さかつた頃のように名前で呼んでしまう。真介は私の震える声に目を細めると一度チユツと音を立てて私の手のひらを吸うとあっさりと解放した。私は声を出さないように震えるので精一杯だつた。「気をつけて帰れよ加奈子」

ヒラヒラと手を振り颯爽と去る真介を涙目で睨み付けると絶対に好きになるもんかと舌を出した。

私はずっとこんな幼馴染み以上恋人未満の腐れ縁な関係が続くと思っていた。けれど運命の決定打は珍しくもないそこら辺の道にゴロゴロと転がっているものだつた。

聖桜ヶ丘学園。慎ましやか、おしとやか箱入り娘と三拍子揃つた今や天然記念物並みに珍しい名門のお嬢様方が通う淑女の園。

自分や親友の京子、そして一部の例外を除けば聖桜ヶ丘学園に通うお嬢様方は常に控えめで大人しい。

よつてその辺の道端にゴロゴロと転がっているものでも聖桜ヶ丘学園にはまず転がつていなかろう。運命の決定打に私は見事に打ちのめされた。

見るまいとしたのに一瞬だつたはずなのにその光景が焼き付いて頭から離れない。

一人の女生徒の顔と教師の顔が重なつた。

男は驚いた顔をしていた。だけど唇は重なつたまま。

自分の心臓がやけにドクンドクンと鳴りついむさい。目を反らしていのに反らせない。

何故かとても胸が締め付けられて痛い。

息がうまく出来なくて苦しくなる。

自分の内側から激しく込み上げてくる感情を止めることが出来ず叫び声をあげそうになる。

男 真介が女生徒の両肩に手を置き…。

縫い止められてしまつたように動かない足を身体中の力を総動員して無理矢理引き剥がすと、全速力でその場を離れた。

思い出すな何も考えるな頭が指令を出せば出すほど先程の光景が鮮明に蘇る。嗚咽が漏れそうな唇をきつく噛み締め、家までただひたすら走り続けた。

ベッドにドサリと身を投げ出し突つ伏すと枕の両端を引きちぎり、そんな力で掴み声を押し殺して存分に泣いた。

女好きの幼馴染みの事だからキスの一いつや一いつ軽いものなのだろう。

そう思つていても実際にキスシーンを叩撃するのは自分で思つていたよりもかなりショックだった。

今はその理由を考えたくなくて私は涙の滲む眼を閉じた。

「おはよっ」

家を出た途端どこかぶつきらぼうな真介の声を掛けられ肩が跳ね上がり一気に心拍数が増した。

一晩中泣いて赤く腫れぼつたくなつた眼のせいだけではなく、一瞬にして脳内に蘇つたキスシーンのせいで顔を呑わせることが出来なかつた。

自分でも滑稽な位顔が強張つてゐるのが分かる。幼馴染みのキスシーンくらいなんだと叫つのだと自分に言い聞かせるが効果はない。

このときばかりは家が隣同士な事を本氣で恨んだ。「加奈子?..」真介が怪訝そうな顔をして私の顔を覗き込もうと身を伸ばしてき

たので咄嗟に思いつきり顔を反らし全速力で駆け出した。

「おい！？」

真介が驚いたような声をあげたが私は一度も振り帰らなかつた。
追いかけてもくれないんだ。

たつたそれだけのことが胸に突き刺さつた。

朝早い誰もいない教室で一人沈んで居ると聞き慣れた声が掛けられた。

「そんな風に重い空気漂わせてうじうじするなんてらしくないよ
加奈」

「だつてわけわかんない。自分の気持ちもあいつの態度も」

「なら加奈にも解ける方程式を教えてあげる」

数学が苦手な自分に解ける方程式など合つただろうかと首をかしげていると京子がとても優しい眼差しで見つめてきた。

「一、何故そんな状態になつたのか。二、それが他の男だつた場合どうなのか」

唐突な質問に驚きながらも答えを考えてみる。

「一、真介と女生徒のキスシーンを見たから」「他の男だつたらあーあやつちやつたと思いながらも出歯龜根性でしつかり見る」
すると何か自分は真介がキスをしていたからショックを受けたのか。

つまりどういうことだ。

「加奈あんたそれ出歯龜の意味間違つてる」

という友人の突つ込みが入るがそれどころではなかつた。

方程式みたいに考えると「一、真介が原因らしい + 二、他の男だつたらど問題ない、というかうでもいい=私は真介が好き！？」

答えに辿り着くと私の顔は口を吹くんじゃないかという位真っ赤になつた。

すると見透かしたかのように京子が言つた。

「それじゃあいつてらつしゃい」

「えいどーへ？」

動搖のあまり声が上ずつてしまつ。

「高杉先生のところへ、告白をしに。行くでしちゃう」

「ひつ告白なんて無理、幼馴染みとしか思つてないよあいつの場合！」

力一杯否定すると京子はからかうような表情を浮かべた。

「加奈には弱きも後ろ向きも似合わないよ。玉碎覚悟で迫りな。キスシーンだけで動搖している奴がそれ以上なんて許せるわけないじゃん。高杉先生と誰かのラブシーンを見たくないなら加奈が彼女になるしかないでしょ」

暗に真介は女たらしと言つてゐる氣もするがこれが親友独特の励ましだと伝わつたので、素直に頷くことにした。

「うんありがとう京子」

覚悟は決まつた。後は告白して奴の気持ちを確かめるだけだ。

先程全力で走つてきた道を家に向かつて逆戻りしようと足を踏み出した瞬間声が掛けられた。

「どこにいくんだ」

高杉真介が校門にもたれ掛かりタバコをふかしていた。

「不良教師」

「ああ？」

「タバコ体に悪いわよ

「心配してくれんの？」

一ヤリと笑いかけられ心拍数が急激に上がつた。

「べつ別に私はただ…」

「ただ？」

思いの外優しい声に促され体が燃えるように熱くなる。

「ただ…」

それきり言葉の続かなくなつた私に真介は優しく語りかけた。

「昔まだガキの頃告白した子がいてさ、それまで女に振られたこ

とのなかつた俺がものの見事に断られてもう駄目。そいつの事以外考えられなくなつたこの俺が」

「へえ女たらしが珍しい」

声が震えないようにするのが精一杯だつた。

ふと真介が此方が赤面するほど蕩けるような笑みを浮かべた。

私は優しい眼差しに目が反らせなくなつた。

「そいつとは腐れ縁でさ、幼馴染みでずっと家が隣同士なんだよな」

「へつ？」

我ながら間抜けな声が出た。

「まだ分からぬのか加奈子」

耳元で低い美声を流し込まれて背筋が震えた。

真介が首筋に口付け囁く。

「俺の事好きだろ？」

認めるのは癪だが好きだと言おうとするとき唇を奪われた。

「つ…

音を立てて唇を解放されると頭がぼうとした。

そんな私の様子を見て真介は楽しそうに笑つた。

「ファーストキスは檸檬の味

「ばつ馬鹿」

こうして腐れ縁で幼馴染みな私と真介の恋愛は始まつた。
数学が苦手な私が解けた方程式は恋愛の方程式だつた。

(後書き)

よろしければ、
の小説評価／感想アンケートにご協力ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0002d/>

数学的恋愛 <恋愛方程式>

2010年10月19日11時43分発行